

〔 編集後記 〕

2000年の4月から、医学部の博士論文は英文であることに決まりました。

数年前から、教授会ではこれを実現しようと努力しておりましたが、移行期の情状酌量の采配で、実行がのびていたものです。その上、impact factorがある点以上の雑誌に採用されるような研究成果があった場合は、大学院の4年の就業年限も3年に短縮されるという指針もできました。

すでに、このような方針で、学位審査を行っている大学も数校あるときいています。

英語を母国語としない、ドイツ、オランダ、フランスでも、英文となつて久しいのですから、日本語を母国語とする私達も、当然の覚悟でしょう。

さて、千葉医学雑誌も、もとはといえば、学位論文公表のために創刊されたと思います。当時は、現在のように数えきれないジャーナルはありませんでしたから、その意義は深かったと思います。せつかく、英文で書いたのですから、各人は国際的に読まれる雑誌に投稿されるでしょう。

千葉医学雑誌に投稿するような英文論文では価値ないといってしまうと、千葉医学雑誌の衰亡につながります。千葉医学雑誌を国際的ジャーナルにするという崇高な理念は捨てないでいきたいと思ひます。

それでも、Tohoku J Exp Medのように一時は国際的であったものが、時代の流れに勝てず、退行していく現象をみると淋しくなりますが。どの国際的ジャーナルでも、時に、全く下らない論文が採用されたり、その逆に、価値ある論文が、rejectされたりすることがあります。例外的に、British Journalは、地域的な情報データーなど、とりあげてくれますが。国際的見地から、採用されない論文もあるかもしれません。一生懸命研究して、ナケナシの英語の知恵をしぼって、完成した論文の日の目を見せてあげる場があつてもよいと思ひます。そんな意味からも、千葉医学雑誌の論文が、学位論文として認められることを残しておいて欲しいと思ひます。そして、それがより、大きな発展につながつて欲しいと。苦しい考え方ですが、雑誌各々に、特有の役目があることを、もう一度考えてみたいと思ひます。

それにしても暑いですね。シエスタが欲しい…と思ひつつ、皆様も頑張っておられることでしょう。会議が減つても、これを機会に原稿書きに御忙しいかもしれません。千葉医学雑誌にも御協力をお願いします。

(安達 恵美子)